

万葉集: 椿を詠んだ歌とつらつら椿外苑

椿は古事記にも登場し、古くから神聖な樹木として扱われていたようです。
万葉集には椿を織り込んだ歌が9首あります。つらつら椿外苑に
実生(みしょう)椿を移植する際に、その万葉集より借用し命名しました。
※紫色は移植 緑色は移植せず



つらつら椿

第一巻: 巨勢山のつらつら椿つらつらに

原文: **巨勢山乃 列々椿 都良々々尔 見乍思奈 許湍乃春野乎**
作者: 坂門人足(さかとのひとり)

よみ: 巨勢山(こせやま)のつらつら椿つらつらに見つつ思(しの)はな巨勢の春野を
意味: 巨勢山のたくさんの椿たちよ。春に咲く椿の美しさを褒め称えたいものです。



あさひにの
朝日式乃

2007年 自家栽培種
自然実生(親不明)



つらつらつばき
列々椿

自然実生(親不明)



つらつら(に)
都良都良(尔)

自然実生(親不明)



みつつ
見乍椿

2011年 自然実生
(親不明)



しのはな
思奈椿

年不詳自家自然実生
(親不明)



おののはの(を)
小野乃春野(乎)
年不詳自家自然実生
(曙?)

巨勢山乃を朝日式乃(朝日2の)に、
許湍乃春野(巨勢の春野)を
小野乃春野に変えて命名しました。



知る、育てる、つなげる
**みんなの
趣味の園芸**
NHK出版
令和2年(2020年)12月
14日放送

歌に詠まれている巨勢は、現在の御所市古瀬の辺りだそうです。
古瀬にある阿吽(あうん)寺は椿の名所で「巨勢山のつらつら椿つらつらに見つつ思はな
巨勢の春野を(巻一の五四)」という万葉歌碑があります。
この歌は、秋に詠まれた、春に咲く椿に思いをはせた歌です。(奈良県万葉文化館 小倉 久美子)



第一巻: 川上のつらつら椿つらつらに

原文: **河上乃 列々椿 都良々々尔 雖見安可受 巨勢能春野者**
作者: 春日蔵首老(かすがのくらびとおゆ)

よみ: 川上のつらつら椿つらつらに見れども飽かず巨勢(こせ)の春野は
意味: 川沿いのたくさんの椿をよくよく眺めているけれど、巨勢の春は飽きないことです。

椿(ツバキ)

日本語独自の用法

春に早い時期から咲き始めるところから「春を呼ぶ花」「新しい年を寿ぐ花」とされてきました。「春を告げる花木」の意味でこの字があてられたと考えられています。
万葉人にとって「身近な神聖な春を告げる花木」

徳島市観音寺遺跡

左記の木簡出土
辞書か音義(発音の注釈)の抜き書きとみられます。この木簡は7世紀末~8世紀前半ごろの土層から出土し、(坂門人足の)歌とほぼ同時期のもので、当時「椿」がツバキと訓読みされていた確実な証拠となります。



あかず
安可受
年不詳 自然実生椿
(親不明)



↑NHK R2.12.14放送&NHK趣味の園芸R2.12月号P123→